

本日のルカ福音書にはヤイロという会堂長が出てきます。彼の12歳の一人娘が病気になる、床についています。しかし、快方に向かうどころか、死にかけていました。ヤイロは病をいやすイエスのうわさ話を聞いたのでしよう。イエスを捜し出して癒してもらおうとします。ヤイロがイエスを捜し出して足元にひれ伏して自分の家に来て、娘の病を癒してくださいと懇願しました。ヤイロは群衆に囲まれているイエスのもとに行くために、その群衆の中を通り抜け、イエスの足元にひれ伏しました。そこにはヤイロの必死さが表されています。

そこで、イエスはヤイロの家に向かったのです。ところが、イエスとヤイロが急いで向かっている最中に、イエスは急に立ち止まり、「わたしに触れたのはだれか」と言われます。イエス御自身から力が出ていくのを感じになったからでした。誰かが自分に触れることで癒されることを強く望んでいることに気づかれたのです。群衆がイエスに押し寄せている中での出来事です。それは12年間出血に苦しんでいた女性でした。彼女はその病気を治すために全財産を使い果たし、途方に暮れていました。その女性は、イエスが気づかれたことに対して、47節を見るとわかりますが、隠しきれないと思つて震えながら進み出て、触れた理由と、たちまち癒されたことを皆の前で話したのです。

なぜなら、12年間出血し続けていたということは、当時のユダヤ教の律法概念では、汚れた存在として忌み嫌われていたからです。その差別を受けてきた思いが、彼女が震えていた理由です。ヤイロとしては一刻も早くイエスに自宅に来ていただき、娘を癒してもらいたいわけですが、余計な邪魔が入ったと感じたことでしょう。しかし、一方で、長年出血していた女性がイエスに触れただけで癒されたのです。ヤイロは余計な時間は食ったけれども、娘が治る希望も同時に抱いたことでしょう。

ヤイロはイエスの前にひざまずいて、娘の病気を治してもらいたいことを訴えました。しかし、この12年間出血に苦しんでいた女性は、『後ろからイエスの服の房に触れる』（44節）しかなかったのです。表立ってイエスに癒してもらおうことをお願いすることもできなかった女性です。一方、ヤイロはユダヤ教の会堂長をしている人物ですから、ヤイロの立場からすれば、この12年間出血し続けている女性は律法上で言えば汚れている人物です。いわば、正当なユダヤ教の人物の願いが、汚れた女性によって中断させられたのです。二人は対照的な立場にありました。

ところが、49節以下を見ると、事態が急変します。ヤイロの家の者が来て「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わすことはありません」とヤイロに伝えました。これを耳にしたイエスは「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる」とヤイロに言われます。彼らがようやくヤイロの家に着いたときは、人々は娘が死んだことで悲しみに打ちひしがれて泣いていました。でも、イエスは「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ」と言われました。しかし、人々は娘が死んだという報告を受けているので、イエスのことをあざ笑ったのです。

すると、イエスは3人の弟子を連れて娘が寝かされている部屋にお入りになり、そして、娘の手を取り「娘よ、起きなさい」と呼びかけられたのです。すると、この少女は、生き返りません。そして、立ち上がって歩き出しました。イエスは食べ物を与えるように指図されます。娘の両親は非常に驚いたとあります。そして、イエスはこの出来事を誰にも話さないように両親に命じられたのです。

さて、イエスが人を生き返らせたのは、この娘が最初ではありません。ルカ福音書7章11節以下ではナインという町で、ある母親の一人息子をよみがえらせました。また、のちには、マリアとマルタの兄弟であるラザロが死んで4日も経っていたのに、そのラザロを生き返らせます(ヨハネ福音書11章38〜44節)。その際に天を仰いで祈っています。『父よ、私の願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています』(ヨハネ福音書11章41〜42節)と祈っていることを見ると、イエスが死人を生き返らせる業は、神がなさる業であることがわかります。

しかも、本日の聖書個所で明らかのように、イエスはユダヤ教の枠組みで人間存在を区別しません。立派な人間と思われていたヤイロの娘にせよ、12年間汚れた人間存在として忌み嫌われていた女性も何の区別をすることなく癒しています。つまり、イエスが死人を生き返らせたい背景には神が何の区別をすることもなく、すべての人間の存在基盤を回復させることに、神の御旨があることを示すためであることがわかります。

12年間出血に苦しんできたこの女性は、誰からも目を背けられる存在でした。この女性の立場からするならば、立派な人物であるヤイロの娘を助けるためにヤイロの家にイエスが向かっている状況は、願ってもないチャンスでした。イエスにつき従う群衆がたくさんいる中で、誰も自分のことを排除することに気を回す者がいなかったもので、イエスの服の房に触れるチャンスが訪れたのです。44節によると、『直ちに出血が止まった』と簡潔に記されていますが、それは彼女にとっては長年願い続けてきたことが成就した瞬間でもあったのです。

この女性が忌み嫌われていたのは、汚れた女性に触れると、その汚れが乗り移ると考えられていたからです。それに対してイエスは触れられたことで、自分の中から力が出ていったと感じたのです。それはイエス自身の内に宿っている清めの力が引き出されたことを意味します。神の御子であるイエス自身の内に宿っている清めの力が引き出されるということは、神はユダヤ教の律法のように汚れた存在と、聖なる存在であるかに人間存在を区別することなく、神を慕い求める人間存在を清めることに関心があることを示しています。その清める力が死人を生き返らせるというイエスの癒しの業に象徴的に現されているのです。

さて、ヤイロの家からの使いが娘の死を知らせた時に、イエスは「恐れることはない」と言いました。この言葉は、すべての生きとし生ける者に命を与えて創造する神の力を信じなさいという言葉につながっていくのです。私たち人間の目から見れば、現実世界は神の支配が行き届いていないように感じるかもしれません。けれども、その現実を恐るな！とイエスは力強く言うのです。苦難に押し潰されるようなときにこそ、このイエスの「恐るな」という言葉が、私たちに勇気と生きる力を与えるのです。この言葉に押し出されて、今週も一歩一歩歩んできたものです。